——バングラデシュを通してみた南北問題と人間学——

藤　田　雅　子

North-South Problem and Human Science through Bangladesh

Masako Fujita

Ⅰ　はじめに：パラドックス的な普遍性の追求

研究は科学的、客観的、普遍的事象を追求し、仮説を立て検証するという方法が一般的であると自己の立場を認識している。私は研究者であるから研究論文はもとより著書、雑誌の原稿、講演などにおいて、的確な言語により事実を描写する努力をしている。しかし人間学という複合的学問領域に身を置くとき、「なぜ」あるいは「なに」という疑問を抱きながら、答はもちろん仮説の設定すら困難である場合が少なくない。これらを無視するのでは真実の追求と実証はありえないとも考えられる。

「どうしてなのか？」という疑問を投げかけるパラドックス的手法によって、真実追求の間隔を埋める試みがあってもいいと思う。なぜパラドックス的であるかというと本来の研究的手法の逆をいくからである。

Ⅱ　研究方法：南北問題の遭遇と人間学の研究

まず、南北問題を異文化として捉えることから始めよう。南北問題とは国際関係を表わす言葉であるが、1950年代の東西問題に代わり、熱帯や亜熱帯に位置する発展途上国と主として北半球に入る先進工業国の経済格差が南北問題という言葉を60年代より生んだ。

異文化との遭遇は、多面的思考の機会を与えてくれる。ごく身近な例として、食事の仕方を引き合いに出してみる。日本、韓国、中国に住む多くの者は食事に箸を、欧米はナイフ・フォーク・スプーンなどを口に運ぶ道具として使用し、それぞれにマナーがあるが、食に伴う文化の違いである。ところが写真１のように、道具を介することなく指先から食物を口に直接運ぶ場面に出会うと、おおいに戸惑うのである。パン類、果物、菓子などのみならず、私たちが主食とおかずと分けている食物を右手の指先で混ぜ、口に入れる。実年以上の人で日本流のしつけをされた人であれば、行儀の悪い食べ方であるが、これが正統の食事の仕方の国も多い。

服装にしてもマイクロ・ミニ（micro-mini）やボディ・コンシャス（body-conscious）など流行のファッションを受け入れる風俗に慣れていると、女性が身体の線を出さないように、しかも脚はくるぶしから上は露出しない習慣は、大変に窮屈である。写真９や写真15の女性の服装がそれであるが、女性が肌を出すと男性の性欲を刺激するからだという理由を聞くと、さらに戸惑う。

異文化との関係で、このように日本とはまるで逆な習慣を数え上げれば枚挙にいとまがない。たとえば海外のある特定の国を旅しあるいは生活し、その国の文化と接して「な

ぜ」という場合もあるであろうし、海外から来た人々の行動を通して「なぜ」という疑問を抱くこともある。

人間を見るとき、日常性や常識という行動の枠組みを超えた事象に遭遇して、「人間とは何か？」という根源的疑問に遡らざるをえない場合が多々ある。

ここでは、私が昨年２回訪れる機会をもったバングラデシュに関して「なぜ」という問いかけを試みたいと思う。もちろん何らかの回答を導くための材料はできるかぎり集めた上でのことである。これらの材料は、テーマ別にいくつかの雑誌等に掲載した原稿（この論文の最後に、これまで発表分のリストを掲載）に使用したが、これは前述したように、客観的に事実を伝えるためのものであった。しかしなおかつ多くの疑問点は回答が得られないままであるので、その代表的ないくつかをここにさらけ出そうというのである。

バングラデシュの概要を次にあげておく。バングラデシュへの旅行というと躊躇する日本人は多いが、第１表は1988年にバングラデシュを訪れた外国人の人数で、日本人も人数としては少ないほうではない。

第１表　1988年にバングラデシュを訪れた外国人

国　　名	1988年
オーストラリア	1096
カナダ	1608
フランス	1236
西ドイツ	2762
ギリシャ	460
イタリア	973
日　本	4018
オランダ	1457
ニュージーランド	347
ノルウェー	635
スウェーデン	1102
スイス	445
シンガポール	1082
タ　イ	1292
英　国	6088
アメリカ	6167
ソ　連	1532
ユーゴスラビア	433
インド	50826
その他の国	37043
計	120782（人）

出典（1990 Statistical Yearbook of Bangladesh）

〈バングラデシュの概要〉

①位置と気候：位置は、周囲をインドに囲まれ、南東部の一部だけがミャンマーに国境を接し、南はベンガル湾である。首都ダッカ（Dhaka）は北緯23度45分、東経90度29分にある。全土が熱帯気候である。雨季は南西モンスーンの吹く６～10月で、年間降雨量の80％が降る。北東モンスーンが吹く11～２月は乾季でしのぎやすい。真夏の３～５月は気温は25～41度と高くなり、湿度も高いため過酷な季節である。

②面積と人口：面積は14.4万㎢、人口は1989年現在１億1250万人である。ちなみに日本の面積は37.8万㎢、人口は同じ年に１億2300万人である。人口密度はバングラデシュは726/㎢、日本は325/㎢である。

③歴史：1947年にパキスタンイスラム共和

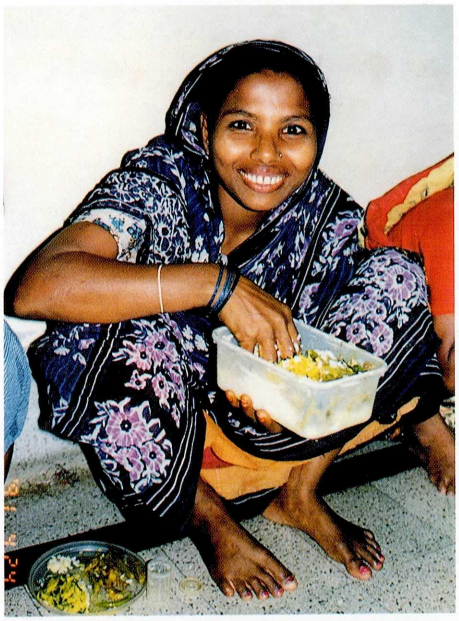


写真１：刺繍工場で弁当を食べる女性。タッパーウェアーはめずらしい

国の東パキスタン州として発足したが、政治的にも経済的にも西パキスタンの植民地的存在で、1971年に分離独立した。この年の12月にインドの軍事介入で第3次印パ戦争が起きた。1973年に国連に加盟し、1975年にパキスタンとの国交を回復した。

④その他：1人当たりのGNPは170ドル。出生時の平均余命は51歳。1人当たりの毎日の必要カロリー充足率は83％。家族が総所得から支出する食糧の比率は59％。安全な飲料水を入手できる人の充足率は46％。保健サービスを入手できる人の比率は45％。合計特殊出生率は5.3。人口1億1250万人のうち16歳以下の人口が5250万人で、5歳未満の人口が1880万人。（この箇所④の数値はユニセフ「世界子供白書」より抜粋し、1988～1989年の統計である）

Ⅲ　人間とは何か？についての6つの疑問

［1］貧困は人間を無気力にするのだろうか

先進国に住むものは、発展途上国あるいは開発途上国（developing countries）などと先進国以外の国々を総称して呼びたがる。また第三世界という呼称もある。しかしどのような呼び方をするにしても、その中には大きな格差が存在している。

つい最近まで途上国と呼ばれていた国のうちでも、新興工業国NIES（Newly Industrializing Economies）である韓国、台湾、香港、シンガポール、アルゼンチン、メキシコ、ブラジルなどは国民総生産GNPに占める工業シェアを25～40％にまで上昇させて、先進国と肩を並べるような国々もある。

しかし一方には、貧困や極貧状態に置かれたままの国々も多く、途上国人口の15％は最貧国に住むと言われ、その数字は約4億人と推定されている。

各種のマスメディアを通して報じられているように、バングラデシュという国はアジアでもっとも貧しい国のひとつである。経済開発協力機構OECD（Organization for Economic Cooperation and Development）が指定する後発開発途上国LLDC（Least among Less-develoloped Countries）のひとつである。最貧国という概念はLLDCと重なる。

バングラデシュはアジアにおいて、ネパールやブータンと並びLLDCに属し、1人当たりのGNPは、いずれも170～180ドルである。ネパールの1870万人、ブータンの150万人という人口に比較するとバングラデシュは桁違いに多くの人口を抱え、既述のように1億1250人に達し、しかも人口の増加はとどまることを知らない状態である。地球上の最貧国LLDC人口の30％をバングラデシュが占めると推定されているほどである。

しかしバングラデシュの中で余裕のある生活をしている人々もいる。広い家に住み、メイドやサーバントを雇用し、運転手付きの車を持ち、門番が門の開閉をするのである。これほどではないにしても、日本の中流と大差ない生活をしている人々もいる。統計的な資料は入手できないが、たぶん両者を合わせると全国民の数％程度になるのではないかと推測される。

写真2は裕福な家庭でパーティが開かれ、冷房がきき、すばらしい調度品に囲まれた部屋で、伝統楽器のハーモニアを奏で、ベンガルが生んだ偉大な詩人タゴールの詩を吟じる女性である。これとは対照的に、写真3は水辺につながれた粗末な舟が我が家である人々もいる。子どもは生まれた家によって育ち方が運命づけられ、写真4のように教育とは無縁な子どももいれば、写真5や写真6のように、正規の学校教育や課外教育を受けている子どももいる。ただし写真5～6のような子どもは少数派である。

そこで疑問が生じるのであるが、貧しい人々は苦しさから逃れるためになぜ行動を起こさないかということである。日本では江戸

時代、18世紀中頃あいつぐ飢饉に耐えられない農民が各地で一揆を起こし、生きる必然性を行動で示した歴史を考えると、極貧状態の人々が暴動や一揆を起こさないという不気味な静けさがどうしても理解できない。そこに裕福な暮らしをしている人々がいるのである。第２表は貧困の状況を示すが、１日の摂取カロリーが2122カロリー以下の者が国民の２人に１人、1805カロリー以下が５人に１人という悲惨な状態である。

同じ疑問をインドのカルカッタ、ボンベイ、オールドデリーで感じたが、ヒンズー教徒が大半を占めるインドにおいては、現世での善行は来世の幸せや上位のカーストを信ずることにつながるから、たぶん路上生活者は現世での運命を甘受しているのだろうと漠然と推測した。インドはバングラデシュよりも貧富の差は大きく、裕福な者は門前の乞食をかき分けて我が家に出入りしたりしているが、貧しい者は裕福な者を襲うという行

写真２：裕福な家でハーモニアを奏で、タゴールの詩を吟ずる女性

写真３：住みかは一隻の粗末なボートの貧しい人々

第２表　カロリー摂取量からみた貧困人口

年	貧困ラインⅠ				貧困ラインⅡ			
	貧困者の人数（単位100万人）		貧困者の占める率（％）		貧困者の人数（単位100万人）		貧困者の占める率（％）	
	地　方	都　市	地　方	都　市	地　方	都　市	地　方	都　市
1973－74	57.4	5.6	82.9	81.4	30.7	2.0	44.3	28.6
1981－82	60.9	6.4	73.8	66.0	43.1	3.0	52.0	30.7
1983－84	47.0	7.1	57.0	66.0	31.3	3.8	38.0	35.0
1985－86	44.2	7.0	51.0	56.0	19.1	2.4	22.0	19.0

注：貧困ラインⅠは１日成人１人の摂取カロリーが2122カロリー以下
　　貧困ラインⅡは１日成人１人の摂取カロリーが1805カロリー以下

出典（1990 Statistical Yearbook of Bangladesh）

動は日常的に見られない。バングラデシュの２度の訪問で、インドで感じたのと同様の疑問がよみがえってきたが、ますます疑問は深くなるばかりである。

宗教は純粋か？という問を［４］で投げかけている。イスラムの世界は、もてる者がもたない者に施しをするのが当然であるからかもしれない。貧しさしか知らない人は、裕福な人々の生活を想像することすら不可能なほど貧しいからかもしれない。彼らがマイノリティであれば、生きる権利の主張という形をとってターゲットを絞り抗議行動を起こすかもしれないが、貧しい階層が圧倒的である。いくつかの推測はできても、確かな答は見いだせない。

貧困は人間を無気力にするのだろうか？

［２］祖国へのアイデンティティは持続するのだろうか

私はにわか仕込みであるが、例えば「ありがとう」「おいしいですね」「行きましょう」「いらっしゃい」「座りましょう」「睡蓮（シャプラ・国花」「ノクシカンタ（伝統的刺繍）」「水」「砂糖」「紅茶（ベンガル人が好む飲み物）」「子ども」「女性」などのベンガル語の片言を英語に混ぜて会話で使った。どこの国よりも片言の国語であっても歓迎され、相手との距離の接近を感じた。

国語であるベンガル語を守るために、そして国を独立に導くために多数の血が大地に吸い込まれていったにもかかわらず、独立から

写真４：学校教育とは無縁の子ども

写真５：中等教育を受ける女子。一般的には女子の教育は男子より遅れている

写真６：伝統楽器をはじめ音楽教育を受ける上流階級の少年、少女

20年を経過した現在あのエネルギーはどこへ行ってしまったのだろうかと感じた。ベンガル人のベンガル語を守る力は凄じいものがあったようである。しかしバングラデシュの人はベンガル語を守り通したという誇りは、底辺まで達していない。

バングラデシュの人々にとって、戦勝記念日（写真７は戦勝記念塔である）、独立記念日と並んで大切にする日が２月21日である。1952年２月21日、まだ東パキスタンであった時代、西のウルドゥー語の支配に反発し、ベンガル語の国語化を要求する学生たちのデモ隊に警察隊が発砲し、多数の死傷者を出した事件がある。殉難者の冥福を祈る「殉難者の塔」は警察隊や独立戦争によって何回か破壊され、現在では写真８のように再建されている。この殉難者の塔は中央の塔が母なる母国と母語を表わし、左右の塔は子であるベンガル語とベンガル語を守るために戦った人々を象徴するシンボル的存在であるという。

私が２度目のバングラデシュ訪問時の９月にダッカ大学を訪れた。来るべき選挙に対して学生たちの集結を恐れた当局によって大学は閉鎖中で、広い構内は静まり返っていた。ダッカ大学に隣接する「殉難者の塔」は一般人たちが散策していたが、ベンガル語の国語化を要求して立ち上がった学生たちの記念像は人気（ひとけ）のない大学にたたずんでいた。（写真９）。

２月21日事件といわれたほどであるのに、それから40年を経過した現在、初等教育の就学率は低く、成人の識字率も極端に低い。国連の統計によると、小学校の就学率は、男子67％、女子44％であり、小学校に入学しても小学校を終了する率は男女を平均すると20％にすぎない。成人の識字率は男性が45％、女性が19％であると同じく国連の統計は出しているが、識字の基準はかなり低いものと推定する。血を流し守った国語は、「話す」「聞く」にとどまり、「読み」「書き」にまで浸透していない。２月21日事件の際に、学生たちが要求したのはベンガル語のアラビア文字表記化への抵抗であったことを考えれば、識字率の低さはなげかわしい限りである。

第４表は５～14歳の児童労働者を表わす。農業と非農業を合わせて、270万人以上の児童が働いていることになるが、実際はこれをずっと上回る人数であると推測される。スラムの寺小屋式学校で、小さな黒板にチョークでベンガル語を書く練習をしていた子どもの姿があった。子どもには教育より労働力として求められる極貧層出身であるだけに２月21日事件と関連させ、意義深い何かを感じた。

その反面、当時の運動のエネルギーはどこへ行ってしまったかと考えさせられる場面にも遭遇する。バングラデシュで唯一の児童病院を見学したが、院長が吐き捨てるように「優秀な医者は国外に出てしまう」と言ったのである。知識人は国内にとどまり、母国の発展に尽くすよりも、国外での活動を望む者が少なくない。働く場がない、収入が低いと彼らは異口同音に言う。

世界のセツルメント運動発祥の地で、ロンドンのイーストエンドにある「トインビーホール（Toynbee Hall）」を訪れた時（昨年1991年12月）、館長は「現在、お世話しているのはベンガル人がほとんどで、住宅や学校を含むサービスを提供している」と説明していた。ロンドンに小ベンガルが出現しているかの感があった。バングラデシュは、イギリス統治時代のインド、飛び国家パキスタンの東パキスタンの時代、そしてバングラデシュと目まぐるしく歴史が動いている。

第二次世界大戦以前に植民地をもっていた国々の多くが、現在ではそのつけが回ってきているが、イギリスはこれが歴然としていて、旧インドや香港をはじめとする多くの民族を抱える。特に貧しい国からの流入が多く、ベンガル人が際立っているという。

バングラデシュにおいては極貧の階層に国

外に出る機会は訪れないから、国外脱出は一定レベル以上の社会的地位がある者だけの特権である。２月21日事件を振り返れば、一部の知識人やエリートが起こした運動であって、国民の大半を占める貧しい農民や労働者とは分断された行動であったのだろう。現在のエリートが自国からの「脱出」を第一に考えているとしたら、当時のエネルギーが持続するわけはない。国を愛する気持ち、そして祖

写真８：殉難者の塔

写真７：バングラデシュを訪れる人は必ず案内される戦勝記念塔

写真９：ベンガルとベンガル語を守るために立ち上がった学生の像。私の隣はダッカ大学のイスラム助教授

第３表　医療の進展状況

年	病院		公立無料診療所	ベット数		医師（人）	看護婦（人）	看護助手（人）	保健婦（人）
	公立	私立		公立病院	私立病院				
1977	131	n.a	1752	15463	n.a	6508	1739	930	413
1978	388	36	1752	16853	2685	7035	2012	1041	413
1979	405	36	1752	17494	2703	7909	2461	1167	432
1980	510	39	1752	18957	3030	9183	3019	1353	440
1981	512	164	1468	19021	4771	10065	3736	2239	449
1982	544	164	1446	19136	4771	10333	4500	2934	473
1983	560	164	1493	20286	4771	11496	5164	3424	758
1984	568	164	1559	21870	4771	13500	5800	3850	1176
1985	596	164	1275	22874	4771	14591	6418	4399	1581
1986	600	164	1275	23306	4771	16090	6912	5199	1584
1987	608	267	1310	26575	6463	16929	7000	5837	1795
1988	608	267	1310	26871	6463	18030	7390	6556	—

出典（1990 Statistical Yearbook of Bangladesh）

国へのアイデンティティとはいかなるものであろうか？

［3］人間はどこまで悲しみに耐えられるだろうか

世界の国々を比較するために、さまざまな指標が用いられている。国民総生産 GNP（Gross National Product）、国内総生産 GDP（Gross Domestic Product）、国民所得（national income）、国民総支出 GNE（Gross National Expenditure）など、その多くが経済指標である。人間の生死に関する指標としては日本人に親しみがあり、関心をもっているのは平均寿命（出生時の平均余命）くらいのものである。高齢社会と少産化傾向を反映した1.57ショック以来、合計特殊出生率にもいくぶん注意が注がれている。

ところが乳児（1歳未満）死亡率や5歳未満児死亡率と聞いても、身近にそして情緒的に共感してこの言葉が理解できる日本人は少ないだろう。これらの死亡率は出生1000に対する比で表わすが、日本はいずれも世界最低で乳児死亡率は4、5歳未満児死亡率は6である（1989年の国連統計）。自分の寿命には誰でも関心を示すが、乳幼児の死亡は日常とは掛け離れた特異なアクシデントであって、関心の外に置かれている。

ところがバングラデシュにおいて乳児死亡率は116に達しており、この世に生を受けても1歳の誕生日を迎えられない赤ちゃんは10人に1人以上に達する。日本ではいま示したように250人に1人の割合である。バングラデシュで5歳未満児死亡率は184であるから、5歳まで生き延びられない子どもは5人に2人の割合である（数値は、いずれも1989年のユニセフの統計による）。統計は感情を込めずに、死の数値を表わす。しかし人間の死、子どもの死である夭折は実に悲しい数字なのである。

私のバングラデシュ訪問の目的は、最貧国でしかもイスラム教国における女性と子どもの状況を知ることであった。したがって訪問先も女性と子どもの両者が関係する場所が大半を占めた。

『ガルシャン女性地域クラブ』という大学教授、弁護士、大臣夫人など現地の知識人である女性たちによるボランティア団体があり、無料の診療所や子どものリハビリテーション施設など運営的な活動をしている。

その診療所で、子どもを10人生んで生存しているのは4人という女性に出会った。ベンガル語のできない私は、診療行為に忙しい医師に通訳を頼んで患者の様子を知ろうというのであるから迷惑この上ないことである。彼女は60歳代半ばか、あるいは70歳近いという私の推測はみごとにはずれ、35歳であった。ヒアリングの間違いではないかと、確認しても35歳であった。白髪、やせ衰えた肌には深いしわ、抜け落ちた歯、くぼんだ目、サリーの下から骨張った足がのぞく。どこから見ても老婆である。写真10～11は、その無料診療所と順番を待つ患者たちである。子ども連れの母親の姿が目立つ。多い病気は皮膚病と下痢性疾患であるという。

家族計画が隅々にまで行き渡らないために、とくに極貧の多くの女性が十代から子どもを生み始め、出産間隔も短く、しかも極端に栄養状態が悪い。妊娠と出産に伴う女性の死は先進国の何十倍という率に達しているが、生まれた子どもも低出生体重児（出生時の体重が2500ｇ以下の子ども）が28％と世界の中でも最悪の数値に達している。0～4歳の子どもの栄養状態も劣悪な数値を示し、70％が中度と重度の低体重状態にある。そうして医療に接近する機会もなく子どもたちが夭折するのである。乳幼児の死が日常に存在している社会である。

第3表は、バングラデシュ全体の医療施設と医療従事者を示すが、1億以上の人口のこの国において施設も従事者も少ない。しかも

あっても、交通事情が極端に悪いためにそこまでたどりつけない人、医療費を払えない人、薬を買えない人が多数を占めている。

無料診療所で出会った女性は、20年ほどの間に10回も介助者のいない出産を繰り返し、6回もわが子の死を見つめているのである。人間はいったいどれだけ悲しみに耐えられるのであろうか。どれだけ苦しみに耐えられるのであろうか。

日本では国民一人当たりのGNPは、スイスを例外とすれば世界で最高といってもよい。そして乳幼児死亡率は世界最低、平均寿命は世界最高である。つまり、金銭も命も手中におさめ、世界でも稀有なる存在の国に私たちは生活しているのである。

さて、日本の日常に戻るが、私は産業カウンセラーとして企業におけるメンタルヘルスの手伝いをしている。相談内容の多くが苦しさ、悲しみ、怒りなどマイナス感情を伴う。簡単に言えば、出社拒否、サンドイッチ症候群、三角関係、離婚、燃えつき症候群、青い鳥症候群、ピーターパンシンドロームなど感情の混線を解きほぐすサポートをしている。分裂病や鬱病は早期に精神医療のルートに乗せる努力をしている。この仕事を通してさまざまな生きざまと遭遇する。

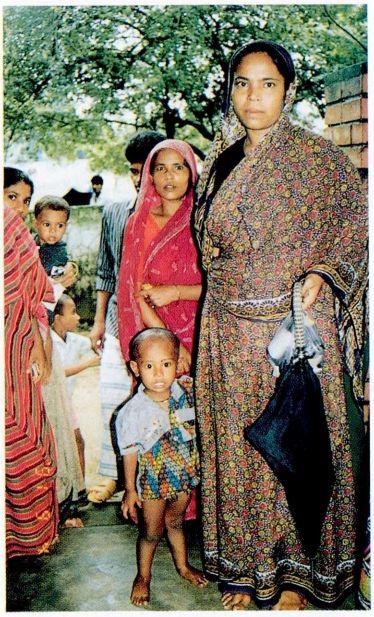
一例を上げよう。悲しみのどん底にある47歳のキャリアウーマンが訪れた。30歳で妻子ある男性と一緒に暮らすようになり、彼は妻子と別れたが男女平等を信条とする彼女は夫の籍に入ることを拒み事実婚の道を選んだ。夫の別れた子どもたちに、彼女は夫に代わって養育費を送り続け、それが完了した時点で、夫は別の女性のもとへ去ってしまい17年間の結婚生活にピリオドを打った。精神的な混乱状態の中で仕事上の他の男性と性的な関係をもつようになった。もちろん相手の男性には妻子がある。いったい私の人生は何だったのだろうと嘆き、悲しみ、泣き、豊富な語彙を駆使して自分の胸の内を語る。

道徳や社会通念、常識という言葉を排除するなら、彼女は苦しいのである。耐え難い苦しみの中にいるのである。四苦八苦（しくはっく）という言葉は仏教用語であるが、宗教を意識しなくともこの言葉を無造作にそして頻繁に使用する。四苦は生、老、病、死を、もうひとつの四苦は愛別離苦（あいべつりく）、怨憎会苦（おんぞうえく）、求不得苦（ぐふとっく）、五陰盛苦（ごおんじょうく）を指し、これらが四苦八苦である。

第4表　5歳から14歳までの児童労働（単位は千人、統計は1985～86年）

雇用状況	合計	5～9歳			10～14歳		
		小計	男子	女子	小計	男子	女子
農業　小計	1759	5	5	—	1754	1700	54
自作農	16	—	—	—	16	16	—
日雇い	739	5	5	—	734	726	8
自作農の手伝い（無給）	1004	—	—	—	1004	958	46
非農業　小計	976	29	20	9	947	445	502
個人業	100	5	5	—	95	78	17
自営	561	18	14	4	543	163	380
日雇い	75	—	—	—	75	32	43
自営の手伝い（無給）	240	6	1	5	234	172	62

出典（1990 Statistical Yearbook of Bangladesh）



▲写真10：無料診療所。診療は土曜日と水曜日の午前９時〜11時、という文字が見える

写真11：無料診療所で順番を待つ人々。土曜日は予防注射と家族計画の指導もあり、医師は大変に忙しい ▶

四苦八苦に重さがあるのだろうか。そうならば重さを測定できるのだろうか。

四苦八苦にも南北問題が反映されるのだろうか。つまり、経済的に反映した国と最貧国との間に南北問題を反映した四苦八苦の格差が存在するのだろうか？という問い掛けでもある。

［4］宗教は純粋であるのだろうか

日本人は宗教に疎いとか、無関心であるといわれる。結婚式は神道で、葬式は仏教でというのが一般的である。大半の人が宗教を意識しなくても日常生活を営めるというのが日本社会であろう。

イスラム教の国（一般にイスラム教徒が人口の大多数を占める国を、イスラム国家と呼ぶ）としては、バングラデシュはインドネシアに次いで私が訪れた２番目の国である。イスラム教徒の絶対的規模からすれば、インドネシアについでバングラデシュはパキスタンと並ぶイスラム国家である。ちなみに1989年の人口はインドネシア１億8080万人、パキスタン１億1180万人、バングラデシュ１億1250万人である。人口のすべてがイスラム教徒ではないが、大半がイスラム教の信者である。イスラム原理主義のお膝元である故ホメイニ師のイランですら人口は5340万人である。イスラム教徒最大の聖地メッカがあるサウジアラビアの人口はたった1360万人である。

一般論としてはメッカから離れるほどイスラム教の掟の束縛は弱くなるといわれる。その意味ではインドネシアはサウジアラビアからもっとも遠い距離にあり、私はゆるやかなイスラム教から経験したことになる。もっともインドネシアにしてもバングラデシュにしても地方では土着の宗教やアニミズムなどと融合した形のイスラム教もある。

バングラデシュに関して、宗教は純粋でありうるかという問い掛けを政治との関わりでしてみてみたい。ダッカにあるバングラデシュで唯一の児童専門病院に、『バングラデシュ女性協会』が資金を調達して建設した児童専門の腎臓病と透析の部門がある。そこにはサウジアラビアの資金も入っている。なぜ、

サウジアラビアがバングラデシュを経済的に支援するのかという理由を探ってみた。同じイスラム教の国というだけではなさそうである。

1990年８月イラクのクウェート侵略に端を発する湾岸戦争では、イラクにもクウェートにも国境を接するサウジアラビアは当時、毎日のように報道されていた国である。そしてこの国の紅海側の沿岸にあるメッカは、イスラム暦の巡礼月（12月の７日から13日）に国籍を問わずイスラム教徒に解放されている。巡礼はアラビア語でハッジ（haji）と呼ばれイスラム教徒は一生に一度はメッカへのハッジをなし遂げたいと願っている。

先にも述べたが、バングラデシュは1971年にパキスタンから独立している。そのパキスタンが1974年のイスラム諸国会議開催の際にバングラデシュを独立国家として認めたにもかかわらず、サウジアラビアは承認しなかった。

その理由は、独立当時バングラデシュ（独立以前の東パキスタン）はパキスタン（バングラデシュが独立する以前の西パキスタン）のイスラム教強調路線に反発し、非宗教主義（セキュラリズム secularizum）を打ち出し、1972年の新憲法にもセキュラリズムが盛り込まれ、政教分離が国家の方針となった。背景にはインド・ソ連との親密外交があった。インドはヒンズー教徒が大半を占める国で、イスラム教徒は少数派である。バングラデシュのセキュラリズムは、すなわち「非イスラム」といった特徴を他のイスラム国家に印象づけたのである。

ところが1973年～74年の第一次石油危機の際にバングラデシュが経済的危機に陥ったにもかかわらず、頼みのインドは再建に手を貸してはくれず、これを契機にバングラデシュはパキスタンとアメリカに傾倒していくのである。これはサウジアラビアなど中東の産油国との関係修復にもつながっていくことになった。1977年の憲法改正において政教分離の条項は排除された。

児童病院の腎臓部門の前で、宗教は政治、経済、外交と絡むのだというような印象を抱いた。

サウジアラビアとの国交修復に伴ってハッジの人数も、労働力輸出の数も急激に増加したという。私はバングラデシュ政府が出している統計や資料を調べていて、労働力輸出（manpower export）という言葉を発見して驚いた。資料によってはベンガル語の英訳がマン・イクスポートという言葉になっているものもある。労働力輸出、つまり出稼ぎの多くが中近東にある産油国のイスラム教国であるから、サウジアラビアとの関係修復が出稼ぎに弾みをつけたのである。バングラデシュは国内産業が乏しく、新たな産業育成もままならず出稼ぎによる収入を国も当てにしている。

宗教は、政治、外交、経済、産業そして医療にまで道具として働いているのかもしれない。しかし政治にも外交にも出稼ぎにも、そしてハッジにも参加できない極貧の者は純粋に宗教を信じ、武器にも手段にも使わないような気がする。このような一連の動きは特定

写真12：女性農業研修センターに、日本政府の経済援助で建設されたという記念碑がある

の宗教をもたない者にとって想像の世界の出来事であって、実感としては理解しがたい。

それにしても宗教は純粋でありえるのだろうか？

［5］人間はどこまで傲慢でありえるだろうか

権力と経済力を手中にした者はじつに傲慢である。誰でもない、私たち日本人の自戒の念を込めた気持ちである。

前述のようにバングラデシュ訪問の目的は、女性と子どもの活動状況を知るためであった。日本の経済援助で建てられた女性のための農業研修センターを訪れる機会をもった。写真12は、このセンターが経済援助で建てられたこと、そして日本とバングラデシュ間の協力と友情が刻まれた記念碑で、センターの玄関脇にある。

でこぼこ道を揺られやっと着いたセンターは近代的で、台所もシステム式の調理台が備えられていた。ふと気がつくと庭の一角に仮設のような小屋が目に入った。実はこれは研修の女性たちが煮炊きに使う台所で、近代的な建物の中にある台所は使われていなかったのである。彼女たちはバングラデシュの農村に合うような台所で、かまどを使い、バングラデシュらしい台所用品を使って煮炊きをしたかったのである。

都市部でも、写真13～14のような台所が普通である。この写真ではガスを使用しているが、都市部でもガスの使用は10％をわずかに上回る程度である。農村部の燃料は、麦藁、枯れ葉、牛糞などが80％近くを占め、あとは薪を使っているのであるから、あの近代的な台所はバングラデシュの農村部の生活状況をまるで無視しているといえる。

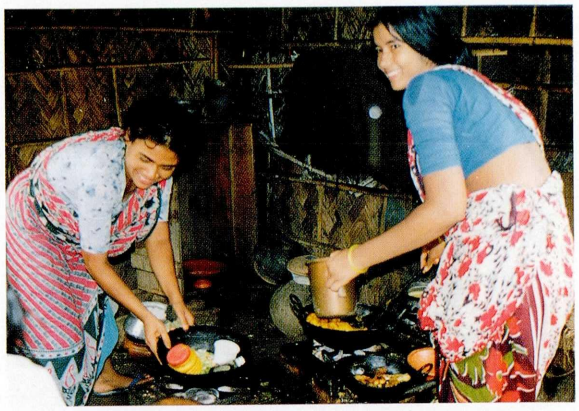


写真13：比較的衛生状態のよいスラムの共同の台所

写真14：暮らし向きのよい家庭の台所に立つメイド

途上国援助といっても、日本国内にいては実感として状況を把握することは難しい。経済力にゆえに日本文化を押しつけて途上国援助であると満足しているなら、傲慢さ以外の何物でもない。たぶん、これに類したさまざまな問題があるのだろうと推測する。

これとは反対の極にあるが、都市部の女性の職業研修センターを訪れたことがある。センターといってもこじんまりとした施設で、周囲の建物と別段変わりはない。母親たちが洋裁の技術を身につけるのと同じ部屋で子どもたちは教育を受けている（写真15～16）。

建物も人材も足りないバングラデシュでは実にうまいやり方である。子どもたちが使っている机にCIDAの文字が目に入った。バングラデシュのどこでも見られるような普通の机である。実はこのCIDAはカナダの海外援助なのである。カナダ文化の押し付けではなく、現地の生活に役立っている。

女児の孤児に栄養・教育・住居を提供し、離婚や夫の死によって一人身の女性に職業指導をする現地の活動があるが、本当に現地の人が望んだ時にCIDAがさりげなく援助をしている。例えば、これらの女性の職業的自立のために機織りの道具（サリーを織る）を増やしたいとなれば10台とか、訓練場を拡大したいとなれば小屋を一軒とか、自助努力を応援するのである。糸を紡いだり機織りという仕事は、バングラデシュでは男性が多く従事しているが、女性もわずかずつ家の外に出始めており、写真17のように女性の職業として取り入れ出している。カナダの援助額は第5表に示すように、日本、アメリカに次いで、バングラデシュでは第3位であるが、各地でカナダへの感謝の言葉がきかれる。

バングラデシュでは、このカナダの他、ノルウェーもよい援助活動をしていた。これらの国々は国内福祉も充実していて、生活福祉・在宅福祉・地域福祉が中心で施設福祉は過去の遺物になりつつある。バングラデシュに対してではないが、オランダの海外援助も定評があるが、たぶんこれらの国は国内福祉の延長線上に海外援助を位置付けているのであろう。日本の福祉は、傲慢そのもので、施設中心、隔離主義が続いているが、これを海外に適用したら、大変な過ちを犯すことになる。

最近、発展途上国援助との関係で政府開発援助ODA（Official Development Assistance）に関しての報道が目立ってきている。第5表と第6表は、南西アジアにおける各国のODAの様子と、我が国の対バングラデシュのODA実績を表わしている。日本は多額の経済援助をしていることが、これらの表から分かる。無償資金協力は、食糧援助として米の供与、食料増産援助として肥料や農業機械の供与、灌漑施設の整備など食料確保を主たる目的にしている。

1978年以来、日本は四次に渡って、ODA倍増の中期目標を立てて、世界の中で日本は政府開発援助の支出額ではアメリカと並ぶ援助供与国である。しかし、なにかと批判を受ける理由は、ODAの歴史と関係し、1950年代は戦争の賠償、60年代は借款、そして70年代は民間の投資、といった特徴があり、日本の輸出拡大との関連が強かった。世界から日本の援助は日本の利益が優先されているという批判を受けているが、改善が早急に必要である。

自助努力を進め、人作りに協力するなど、

写真15：写真16と同じ部屋で、同じ指導者が子どもの学習を見る。机にCIDAの文字

ソフト面の開発協力が真の海外援助ではないだろうか。経済力のある者が、傲慢に何かをしてやる、作ってやるのではない。

写真16：写真15と同じ部屋で、同じ指導者が母親の職業指導をする。

写真17：サリーを織るための糸を紡ぐ女性

第５表　主要援助国による対南西アジア地域二国間ＯＤＡ（88暦年実績）

（支出純額、単位：百万ドル）

	日本	米国	西独	オランダ	カナダ	英国	その他の主要援助国	二国間ＯＤＡ計
スリ・ランカ	①	②	③	⑤	⑥	④	⑦スウェーデン	
	199.83	41.00	37.17	28.35	28.25	30.41	16.43	436.08
	(45.8)	(9.4)	(8.5)	(6.5)	(6.5)	(7.0)	(3.8)	(100.00)
インド	①	⑤	②	③	⑨	④	⑥イタリア	
	179.46	91.00	152.32	115.19	49.19	112.56	56.72	949.83
	(18.9)	(9.6)	(16.0)	(12.1)	(5.2)	(11.9)	(6.0)	(100.00)
ネパール	②	④	①	⑩	⑥	③	⑤スイス	
	62.35	15.00	68.53	5.07	12.54	19.06	12.78	224.97
	(27.7)	(6.7)	(30.5)	(2.3)	(5.6)	(8.5)	(5.7)	(100.00)
パキスタン	②	①	③	⑧	④	⑦	⑤フランス	
	302.18	339.00	96.56	27.18	64.40	33.78	60.70	1,023.73
	(30.1)	(33.8)	(9.6)	(2.7)	(6.4)	(3.4)	(6.0)	(100.00)
バングラデシュ	①	②	⑥	⑤	③	④	⑦ノルウェー	
	341.96	120.00	57.41	71.80	119.98	73.17	36.19	931.43
	(36.7)	(12.9)	(6.2)	(7.7)	(12.6)	(7.9)	(3.9)	(100.00)
ブータン	①	⑰	⑨	⑦	⑩	⑥	②スイス	
	6.77	0.00	0.29	0.36	0.16	0.73	5.76	18.68
	(36.2)	(0.0)	(1.6)	(1.9)	(0.9)	(3.9)	(30.8)	(100.00)
モルディブ	①	⑩	②	⑩	⑥	③	④デンマーク	
	16.61	0.00	1.57	0.00	0.07	1.54	1.14	21.61
	(76.9)	(0.0)	(7.3)	(0.0)	(0.3)	(7.1)	(5.3)	(100.00)
南西アジア計	1,109.47	604.00	414.31	248.59	272.15	271.28	フランス 156.06	3,509.30
	(30.9)	(16.8)	(11.5)	(6.9)	(7.6)	(7.6)	(4.4)	(100.00)

（注）１．（　）内の数値は受取国別二国間ＯＤＡ総計に占める割合。
２．○内の数字は各被援助国・地域における順位。
３．地域計の数値は、端数処理の関係で合わないことがある。

出典　外務省経済協力局、我が国の政府開発援助（下）

第6表　我が国のバングラデシュに対するODA実績

（支出純額、単位：百万ドル）

暦年	贈与			政府貸付		合計
	無償資金協力	技術協力	計	支出総額	支出純額	
85	55.9(8.8)	6.3(1.1)	62.2(5.2)	67.0(3.6)	59.3(4.3)	121.5(4.8)
86	49.4(5.8)	9.3(1.1)	58.7(3.4)	204.8(6.9)	189.8(8.9)	248.5(6.5)
87	124.6(10.8)	11.3(1.1)	135.9(6.1)	221.6(5.6)	198.3(6.6)	334.2(6.4)
88	118.7(8.0)	15.0(1.1)	133.7(4.6)	243.1(5.1)	208.2(5.9)	342.0(5.3)
89	135.6(8.7)	16.7(1.1)	152.3(5.0)	258.7(5.3)	218.3(5.8)	370.6(5.5)
累計	812.5(8.6)	110.0(1.3)	822.5(5.2)	2,044.0(5.7)	1,835.6(6.6)	2,758.0(6.1)

（注）（　）内は、我が国二国間のODA各形態別総計に占める割合。

出典　外務省経済協力局、我が国の政府開発援助（下）

［5］人間の命の尊さに軽重があるだろうか

最初のバングラデシュ訪問から4月26日に日本に帰国した。追いかけるようにサイクロン被害のニュースが入った。インド洋の熱帯低気圧がサイクロン（cyclone）であるが、4月29日夜半に最大級といわれるサイクロンがバングラデシュの南東部の海岸を直撃し、13万人以上（公式発表による数字、実際はこれを上回るとの見方もある）の人々の命を奪ってしまった。サイクロン情報は数日前から出されていたという。仮に警報が届いても、避難する場所もなかったのである。バングラデシュは人口が増加し続け、人口爆発の寸前であるが、結局、貧しい人々ほどサイクロンの被害を受けやすい海岸や、数年におきに繰り返される洪水の被害を受けやすい川辺や湿地帯に住まわざるをえない。人間が住めないようなところに追いやられるのである。

我が国では心臓や肝臓移植のための臓器提供とのかかわりで、脳死論争が繰り広げられているが、これは人工呼吸器の働きによって心臓が停止する以前に脳の機能が不可逆的に停止する状態が出現したからである。また延命技術の進歩は、チューブやモニターをつけながら生き長らえさせることになり、人間としての死と医療との関係で、尊厳死や自然死などについても議論が繰り広げられている。どのように生きて、どのように死ぬかという自己決定の問題でもある。イギリスから始まったホスピス運動もしかりである。それだけに命は尊いのである。地球の北に位置する先進国においては一人一人を尊重することに余念がない。

しかし南のバングラデシュでは一晩で10数万人が死亡している。そして数か月後に訪れると、何もなかったように最貧国の社会は動いている。命があまりに軽すぎる。命の重さにまで南北の格差があるのだろうか？

Ⅳ　まとめ

生と死、人間の感情、アイデンティティ、宗教、人間の傲慢さといったような、ともすれば研究室、実験室、カウンセリング室など箱の中で研究されやすい問題を、地球の南北問題という観点から疑問を投げかけてみた。具体的にはバングラデシュでの経験と日本の生活をかさねつつ、後発開発途上国と先進国との比較を試みた。

いずれも答が出るというものではなく、研究者としてはアプローチを逆流しているかもしれないが、このようなパラドックス的手法も人間学的神秘「人間とは何か？」を解き明かす一助となるかもしれないと思う。

[参考文献および参考資料]
・佐藤宏編、「バングラデシュ：低開発の政治構造」、アジア経済研究所、1990
・宮崎亮・安子、「バングラデシュに生きて、死の陰の谷より」、新教出版社、1985
・宮崎亮・安子、「帰ってこない子供たち、バングラデシュからの祈り」新教出版社、1991
・中田正一、「国際協力の新しい風、パワフルじいさん奮戦記」、岩波新書、1990
・外務省経済協力局、「我が国の政府開発援助」、国際協力推進協会、1990
・ユニセフ、「世界子供白書」、1991
・Bangladesh Bureau of Statistics, 1990 Statistical Yearbook of Bangladesh
・山本茂実、「日本青年は健在だった、バングラデシュ紀行」、朝日新聞社、1985

[これまでに藤田が執筆したバングラデシュに関する原稿]
・「苦難のバングラに着実な国際支援を」、読売新聞「論点」、1991年6月2日
・「見てきた協力隊、バングラデシュ『あら、ここ日本女性が』と驚いた」、国際協力事業団青年海外協力隊、クロスロード、1991年9月号
・「バングラデシュにおける生活の諸側面と女性の活動」、文教大学人間科学研究、第13号、1991年
・「バングラデシュの状況」、日本障害者リハビリテーション協会、障害者の福祉、1992年2月号
・「世界の子どもたち､バングラデシュ① 絶対的貧困で生きる子どもたち」、「② 生活の中にみるさまざま問題」、日本児童問題調査会、こどもの栄養、1992年2月号・3月号
・「バングラデシュの女性の地位向上と子どもの幸せへ向けて」、日本児童問題調査会、子どもと家庭、1992年3月号